TANAKA HIROFUMI
PRESENTS

RAKUGO
THE
FUTURE

JAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

第４回:落語とSF-怪奇大作戦

文:田中啓文

最近、ホラーがブームということで、新聞やテレビでも、怪談がどうのこうのというニュースを多く目にする。きのうも、クリントンとエリツィンがどこやらで怪談をした、などと報道されていたが、あれは何のことだろう。百物語でもしているのだろうか。

というわけで、今回の「落語とＳＦ」は、夏にちなんでホラー関係のネタをお送りしようかなーなどと思っております。

え？　おかしい？　どこがどうおかしいというんですか、あなた。人がせっかくこれからエッセイを書き始めようと……。

何？　今はもう９月で、夏ではない。怪談のシーズンは過ぎている？
（唇に指を当てて）しーっ、しーっ、しーっ。

ほら、外はまだ暑いじゃないですか。蝉も鳴いてるし、電車もデパートもクーラー入ってるでしょ。だから……。

９月は夏なんです。

何？　どうしてホラーがＳＦなのかって？（唇に指を当てて）しーっ、しーっ、しーっ。

それじゃお聞きしますけどね、「パラサイト・イヴ」はＳＦですか、ホラーですか。「らせん」「ループ」はＳＦですか、ホラーですか。答えられないでしょう！
だから、ホラーはＳＦなんです。

強引すぎる？　いいんです、枚数があんまりないんだから。

というわけで、とっとと話を進めたいと思います（ほんとに、黙ってりゃわかんないのに、ややこしいことを言うやつがいるから困るよ）。

さて、「幽霊の正体見たり枯れ尾花」という川柳だかことわざだかがある。これは、幽霊とか妖怪とかいうものは本当は存在しないんだよというような意味で使うが、もう一つ別の解釈があるということを私は先日知った。
「見たり」というのがそもそも誤記であって、これは「三人」と書いて「みたり」と読むらしい。元になっている話は、二百年ほど前に本当にあった話だそうだ。

Ａという女子高校生が、彼氏（仮にＢという名前にしておこう）に誘われて、ある夏休み、Ｂの田舎の親戚のところに遊びにいった。そこはＢの父親の妹Ｃさんの家だったが、まわりに民家がなく、とてもさみしい場所で、夜になるとしんと静まりかえって怖いほどだったという。Ｃさんには、Ａと同い年の夏美ちゃんという病弱な一人娘がいた。

泊まって初日の夜は何事もなかったのだが、次の日の晩、彼女が眠っていると、障子にさらさらと髪の毛の当たる音がする。驚いて飛び起きると、顔に何か冷たいものが触れるではないか。悲鳴をあげて、彼氏が寝ているはずの隣の部屋に行こうとふすまをあけると、そこには白い着物を着た何かが……。
「ぎゃあああああ」

彼女は絶叫を残して気絶した。気がついた時、Ａはふとんに寝かされており、すまなそうな顔をしたＢから意外な告白を聞いた。つまり、彼とＣさんと夏美ちゃんの三人で示し合わせて、彼女をおどかしたのだ。夏美ちゃんが髪の毛を障子に当てて音を出し、Ｃさんが濡れふきんを彼女の顔に当て、Ｂが白い着物を着て、隣の部屋で待機していたわけだ。ちょっとした冗談のつもりだったが、こんな

RAKUGO THE FUTURE

第４回:落語とSF-怪奇大作戦

文:田中啓文

に怖がるとは思ってなかった、という。

彼女がＢと別れたことは言うまでもない。

というわけで、もうとっくにおわかりだと思うが、幽霊の正体は、彼と彼の叔母さんのＣと夏美ちゃんだった。つまり、「幽霊の正体三人（みたり）かれおばなつみちゃん」というのが本来の言い方であったのだが、二百年ほどこの地方に伝承されているうちに、最後の「つみちゃん」が取れて現在の形になったらしい。

私もごく最近、ある人（本人の希望で名前を明かすことができない）に聞いた説なので、もしかしたら細部はまちがっているかもしれないが、当時の文献などに照らし合わせてもかなり信憑性がある話だと思う。いかがだろうか。

しかし、このネタだけで、ここまでひっぱるとは誰が予想しただろうか。私も予想していなかった。

昔から、上方落語には幽霊や妖怪が出てくる話が多い。

上方では、幽霊と書いて、「ゆうれい」と読まずに「ゆうれん」と発音する。

有名な「らくだ」というネタに、「そうれんや、そうれんや。らくだのそうれんや」とはやし立てる場面があって、あれは「葬礼や、葬礼や」と言っているのだが、それと同じ理屈である。こういうことをちょっと知っておくと、ちがうものである。「上方じゃあ、幽霊のこと、ゆうれんっていうんだぜ。君、知ってた？」などとさりげなく会話に挟みこむと、彼女には尊敬の目で見られ、合コンなどでもいちやく人気者になること疑いなしである。また、社会人としても、「専務、上方では幽霊のこと、ゆうれんっていうらしいですよ」などと会議の席上で発言したりすれば、「できるやつ」という評価がくだり、出世街道をのぼること確実である。

ついでに言うと、上方では「いち、にー、さん、しー、ごー、ろく」の次は、「しち」ではなく「ひち」である。だから「質屋」は「ひちや」と発音する。上方落語事典などをひく時、「質屋芝居」「質屋蔵」などのネタは「し」の部を探しても載っていない。これらは「ひ」の部に載っているのだ。また、大阪の古い喫茶店に行くと、メニューに「コーヒ」と書いてある。最後の「ー」が抜けとるやないか、と怒るなかれ。大阪では、「コーヒ」と書いて「コーヒー」と発音するのだ。直木賞をとった「てんのじ村」という作品があるが、あれも、普通はそのまま「てんのじ村」と発音されていると思うが、実際は「てんのーじ村」と読むのである（米朝師匠の著書に詳しい）。

はっきり言って、話が幽霊や妖怪からかなりずれてしまっている。これをさりげなく元に戻すのが、物書きの腕というものである。「ところで、何の話だったっけ。そうそう、上方落語には幽霊や妖怪の出てくるネタが多いという話だった」

うん。さりげなく元に戻せた。

幽霊や妖怪の出てくる落語といっても、そのほとんどはお笑いが基本である。いわゆる「怪談」、つまり、聞き手を怖がらせる目的でする、笑いの要素の入らないホラー落語（「牡丹灯篭」「真景累ケ淵」「四谷怪談」など）もあるにはあるのだが（上方には、典型的な怪談噺として「怪談市川堤」があ

RAKUGO THE FUTURE

第４回:落語とSF-怪奇大作戦

文:田中啓文

る)、そういった語り手の話術によって恐怖と戦慄を盛り上げていくような本式の怪談について、ここではあまり語りたくない。

なぜか。

それは、私がいたって怖がりだからである。だいたい私はホラー映画といわれるものは一切見ない。ホラーマンガも読まない。ホラー落語も聞かない。どうして金を払って怖い思いをしなけりゃならんのか（同じ理由で、私は遊園地などの絶叫マシーンのたぐいには一切乗らない。どうして金を払って怖い思いをしなけりゃならんのか！！）

そのような人間がホラー小説など書いているというのは変だと思われるかたもいらっしゃるかもしれないが、時々、夜中にホラー系の作品を書いている時に、自分で自分の書いている内容にぞーっとしてしまい、泣きそうになることがある。情けない。だから、私は自作のホラーをあまり怖くしないのである。お金を払って本を買ってくださる読者を怖がらせたりするのは失礼ではないか。私のホラー物を読んで、あまり怖くなかったという印象を持った方がいらっしゃるならば、それは「わざとです」と言っておこう。

というわけで、私が以下にご紹介するのは、どれも「わっ」と笑えるような陽気な怪談ばなしである。血も凍るようなホラー落語を期待していた向きには申し訳ないが、なんせ怖がりなもんでしかたないのである。

まず、けっこう怖い「腕（かいな）食い」。頼りない主人公が、歳は十八、絶世の美人のところに養子に行くことになった。先方は素封家だし、文句のつけどころのない話なのだが、そのお嬢さんにたった一つだけ傷があるという。これまでも何度も養子縁組の話はあったが、初夜の晩、新郎が眠ったのを見澄まして、そっと寝床を抜け出し、縁先の雨戸をあけ、高塀をかき登り、裏のお寺の墓地に飛び降りて、そこでバリバリ……という物凄い音がする。その音を聞くと、新郎は驚いて、逃げかえってしまうのだという。主人公は相手が別嬪なので、バリバリ……ぐらい我慢できるだろうと高を括っている。さて、初夜の晩、その娘はやはり寝所を抜け出して墓地に行き、赤ん坊の死骸の入った棺桶を掘り起こし（当時は土葬だった）、縛ってある縄を歯で噛みきると、中から赤子の死体を引きずり出して、にんまり笑い、その腕（かいな）をバリバリと噛み砕き、血をちゅうちゅう吸いだした……。

どうです、怖いでしょ。ここまでは怖いのですが、このあとに信じられないぐらいアホなオチがついているので、「なーんや、そうかいな」で終るのだが、そこまで書くと興ざめなので、皆さん、機会があればぜひ一度、このネタを生で聞いてみてください。

次にご紹介するのは「仔猫」である。今度、その商家に新しく雇われてきた田舎者のお鍋という女中。顔はぶさいくだが、気立てがよくて働きものでよく気がつくので、奉公人にも評判がいい。ところが、そのお鍋に一つの噂が立った。皆が寝静まってから夜な夜などこかへ外出する、とか、深夜、お鍋の部屋をのぞくと、口のまわりを血だらけにして鏡を見ていた、とか。捨ててはおけぬと、その家の主人と番頭が、昼間、お鍋をわ

RAKUGO THE FUTURE

第４回:落語とSF-怪奇大作戦

文:田中啓文

ざと外出させた留守に、彼女の部屋に入り、持ち物を調べることにした。つづらを開けてみると、たくさんの着物。それを順番に取り出していくと、妙な生臭い匂いが漂いはじめた。血の匂いである。恐怖におののきながら、主人と番頭が最後の着物を取ると、そこにはべっとりと血糊が付着した白い毛や黒い毛が……。

このあとどうなるのか。もちろん、信じられないぐらいアホなオチがついているのだが、よく演じられるネタなので、皆さん、落語会へ行って自分の耳で確かめてみてね。

最後に、「信じられないぐらいアホなオチ」の王様である「五光」というネタを紹介しよう。途中までは、とても不気味な怪談である。

道に迷った旅人が山中の辻堂の前で一人の痩せこけた坊主に会う。松の木の根元に座ったその坊主は話しかけても無言で、目に異様な光をたたえ、不気味な雰囲気である。しばらく行くとさびしい村に出る。そこの庄屋の娘が奇病にとりつかれて病み衰えて、死ぬのを待つ身の上だという。深夜、旅人が苦しむ娘の枕もとに行くと、何とさっき会った坊主が恐ろしい形相で亡霊のようにそこに浮かんでいるではないか。坊主は娘に取り憑いていたのだ。旅人は、必死に山道を引き返し、松の木の下に座った坊主に「おまえの執念で、娘は死んだ」と嘘を言う。それを聞くなり、坊主の体は崩れ、骸骨になってしまった。その時、にわかに雨が降ってきた。雨宿りをしようと辻堂の方に行くと、扉のすきまから神々しい後光が噴き出している。驚いて、堂の中に入ると、そこには、桐に鳳凰を刻んだ欄間と、桜に幔幕を描いた屏風があった。

いかがです。オチがわかりましたか。表には坊主と松。そこへ雨が降ってきた。中には桐と桜。これは後光（五光）が差すのもあたりまえ、ということです。え？何のこっちゃわからん？　あなた、花札をしたことないの？

とにかく、最後の最後まで、怪談だと信じて聞いている聞き手を、ラストの一瞬であざやかに裏切るのだから、よほどの腕がないと「なめとんのか、おまえ」ということになるが、さすがに米朝師匠がやると、「なんちゅうアホな話や。あはははは」ということで丸くおさまる。なにしろ人間国宝ですから。

私もこういう小説を書きたいものだ。